寄稿

東南アジア・東アジアカトリック大学連合 第30回総会に出席して

ジェレミー・レッドリック
（藤女子大学副学長）

第30回東南アジア・東アジアカトリック大学連合（ASEACCU（アセアック））の総会が、8月21から24日までオーストラリアカトリック大学（ACU、シドニー）で開催された＝写真。

ASEACCUは、11の国と地域にまたがる91の加盟大学・短大で構成されている。今年もオーストラリア、カンボジア、東ティモール、インドネシア、日本、マカオ、フィリピン、韓国、台湾、タイ、ベトナムから学生を含む大学関係者が出席した。

ASEACCU総会の特徴の一つは、学生が大学の教職員と一緒に会議に参加するだけでなく、会議のパネル討論や行事に深く関わっていることだ。会議の中でも学生が最も重要な参加者であることが繰り返し言及されていた。以下では、プログラムやイベントの幾つかについて報告し、会議で体験したことについての筆者の考えを共有させていただきたい。

初日、学生たちは午前と午後に三つのセッションに参加したが、そのうちの一つはオーストラリアの先住民アボリジニの文化に関する学びのセッションだった。その他のセッションでは、人類が現在直面している気候変動やその他の生態学的問題に焦点を当てて議論が行われた。教職員のためのプログラムはメアリー・マッキロップ記念礼拝堂でのミサから始まった。これに続いて「煙の式」が行われたが、これは訪問者を歓迎する伝統的なアボリジニの儀式である。

2日目は全ての参加者が一緒にACUのライアン講堂で会議に参加した。その日の最初のパネル討論のテーマは、「カトリック大学は何をもってカトリックたり得るのか？」であった。国際カトリック大学連盟の会長であるイザベル・カペロアギル氏らが登壇した。

パネリストたちは以下の諸原理が世界中のカトリック大学を一つにするという考えで一致していた。その原理とは、「愛」「思いやり」「共感」「社会的責任・関与」「自然環境・地球への慈しみと愛」そして「幅広い分野で学生を養成し批判的で積極的に活動する思想家を輩出すること」である。

パネリストたちは、カトリック大学が全ての宗教的信仰の学生、教職員、そして宗教的信仰を持たない人々をも歓迎する包括的な場所であることを強調すると同時に、カトリック大学が愛と思いやりに基づいた倫理的価値を核とする場所であることも繰り返し言及した。筆者はこの点に特に感銘を受けた。

その日の二つ目のパネルでは、ACU学長のズラトコ・スクルビス教授、ルシア・シーリング教授らが登壇し、カトリック大学が社会的インパクトを与える必要性について議論した。パネリストたちは一致して、カトリック大学が地域社会に積極的に関与し、これらのコミュニティーに何かを還元することの重要性を強調した。

3日目は、学生の参加者を含むパネル討論から始まり、韓国、インドネシア、台湾の学生たちが社会奉仕活動を通じた学び「サービス・ラーニング」の経験について話した。学生たちが説明したサービス・ラーニングの経験はカトリック大学が重視している「社会的インパクト（影響）」の一部であり、カトリック大学のカリキュラムの必須部分であるべきであるということを強く示唆している

最終日4日目には、スタッフと教職員のためのネットワーキングが含まれていた。会議の最も重要な側面の一つは、学長、副学長、その他の関係者が他の国の関係者と交流する点にあり、会議中にも幾つかの協定書が署名され、さらに多くのパートナーシップと友情が築かれることになった。

今回のASEACCU総会で筆者が最も感銘を受けたことの一つは、教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』について多くの議論があったことだ。この回勅はさまざまな問題を扱っているが、その一つは人間に自然環境の扱いを変えさせようとする要求だ。

自然環境への慈しみと愛、そして人間への愛、思いやり、包括性に焦点を当てていたことが今回の会議で筆者に最大の影響を与えた。2025年のASEACCU会議は台湾のプロビデンス大学が主催する予定で、日本からもさらに多くの大学関係者が参加するよう期待している。